
造られた天使

君影 涼藍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

造られた天使

【Nコード】

N4692A

【作者名】

君影 涼藍

【あらすじ】

若手ジャーナリスト、アルマの前に現れたのは名前のない少女。聞けば彼女は、研究室での実験から逃げ出した人間兵器『天使』だという。幼く可愛らしい少女の手を引き追っ手から逃げるうちに、次第にアルマは心惹かれていった……

【序章】 叫び そして空へ

投与される薬。

繰り返される実験と検査。

アツイ

眩暈。吐き気。

全身をめぐる激痛。

作られてくカラダ。

ウデ、アシ。

セナカに……………

チガウ！ コレハ、ワタシノジャナイッ……………！！

もがく腕。

掴みあげたモノは白い……………白くて。

ハナシテッ！ ダシテッ！

壊された……………

造られた……………。

私は一体、何なの

【第一章】 衝突

「で？ 結局いくらで買ってくれるわけ？ 俺の記事」

黒髪にサングラス。

護身用の銃をくるくると弄びながら、電話越しに彼はにやついた。

「そちらさんの部下による麻薬密売情報 あんたらがまさかそんなものに手を出してたなんてねー……」

組織の違法情報売りつける。

それが彼、若手ジャーナリスト、アルマのやり方だ。

「言つとくが、ちゃーんと証拠も掴めてんだからな……なんなら号外にしてばら撒いてやろうか？」

時々はつたりをかましたりもするが、今回は自信のある情報だ。買い手も富豪。

大金をがっぽり手にしたいところである。

「はあ！？ そんなんで売れつかよ。……ああん？ んー……はあ、まあ仕方ない」

銃を懷にしまいこみ、座っていた椅子から立ち上がると、再び不適に微笑んでアルマ言った。

「んじゃあ、お約束した金額、きっちり例の講座に振り込んでくれよ」

念押しの決まり文句。

多少値は落ちたが、良い具合に話がまとまった。

アルマは受話器を置くと、宿泊している宿のベランダに出た。

快晴！ とまではいかないが今日も良く晴れている。

と、満足そうに笑みを浮かべるアルマの顔が急にかげった。

黒い影がベランダ……いや、部屋を目掛けてとんでくるではないか。

二、三回の瞬きの間にそれはアルマの目の前まで迫り、衝突した。

高さとスピードの割りには軽いものの、やはり眉を寄せずにはいられない衝撃ではあった。

見事に物体と共に部屋へすべりこむと、テーブルに激突。

派手な音まで響かせ、ついでに私物までぶちまけてしまった。

【第二章】 アナタ、だあれ？

木製の天井が見えた。

天国は見えないが、とりあえず体のあちこちが痛かった。

横目で、できるだけ部屋中を見渡してみると、汚かった。

さっきまできちんと整頓していた書類は散らばっている（しかも中には、くしゃくしゃになったり、やぶれていたりするものもある）し、木製の安っぽいテーブルは倒れ、しかも一部、形が変わっている。

（弁償させられんのかな……これ）

と、のん気に考えていたかった。

それがアルマにとっての精一杯の現実逃避だった。

が、いつまでもこうしてはいられない。その証拠に自分の腹の上に何かが乗っていた。

（さっき、なーんか見たんだよなあ）

普通じゃありえない。自分の目はもしかして、節穴なのか！？とまで思えてきた。

「……………よしっ！」

何に対しての掛け声なのか、アルマはそう呟くと思いつて身を起こした。そして……

ゴンッ！

「げっ……!!」

腹の上から何かがすべり落ちた。

やっぱりそうか、と思っていたところだったが、誤算がここにはあった。

「お、おんなのこお……っ!??」

思わず叫んでしまい口を抑えつけた。しかも、眼を逸らしてしまつてではないか。

(落ち着け……落ち着け、俺。第一なんでこんなところに、女の子が)

深呼吸を荒っぽくし、気持ちの整頓をすると、再び床へと目を向けた。

「……」

青みがかつた銀色の髪。肩の辺りで切りそろえられているそれは、人間がもち得ないような美しさを放っていた。

まつ毛の色も、同じく色素が薄く、部屋の電灯の光を跳ね返して照り輝いている。

「……子供か? こいつ」

アルマはじつと少女の顔を覗き込んだ。少なく見積もっても、5、6歳は年下のようなのだ。

生地の薄い真っ白なワンピースのようなものを身にまとい、露出し

た体はそれに負けず真っ白であった。

「んっ……」

「！」

少女は眉根を寄せた後、うつすらと目を開けた。

それからはっと気がついたように、もともと大きかった目を更に大きく見開いた。

髪と同じく色素の薄い……それでいて輝くように眩しい瞳があらわになる。

むくりと、ゆっくり起き上がると、今度はアルマの顔を覗き込んだ。きょとんとしたその表情のせいか、至近距離で見つめられたことから、アルマの鼓動は仄かに加速した。

「えっと………君、誰？」

いくら年下だといっても、この容姿はアルマの気を惹くに十分な美しさを持っていた。

ただし、アルマが口説くにしては、この少女の顔立ちはあまりに幼すぎている。

「名前……」

少女は、言葉の意味を理解しようと勤めているかのように、おうむ返した。

「……そう、名前」

「ない」

「はぁ!？」

「ないの……つけて」

せがむように、甘えるようなその表情に、アルマは戸惑う。質問に対する答も驚くべきものであったのだが、幼く可愛らしい顔を前にしてはそれどころではなくなった。

「えっと……じゃあ、どうして空から落っこちてきたんだ？」

「……逃げた。研究室から飛んだの」

「飛んだ？」

「うん、ほらっ」

少女が背中をアルマに見せた瞬間、そのきゃしゃな体から白い羽根が舞い上がり、それと同時に見事な翼が生えあがった。

「造ったの。造られたの……でも、実験とか薬とかやなこといっぱい。痛くて痛くて仕方がないの。だからやになって、飛び出した……名前、あっただけ忘れちゃった。それに、前の名前あんまり好きくないから別のが良い。つけて……」

「……っ」

そういえば、前に一度アルマは聞いたことがあった。どこかは知らないが、人工的に天使とかいうモノを造ろうとしている組織がいるということ……。

（噂は本当だったのか……）

アルマが黙っていると、少女は近距離のままアルマを見詰めてきた。名前を決めるまで、その動作が続きそうだったので、とりあえずアルマは頷く。

「わかった……ちょっと待て。すぐには、思いつかねーから」

「うん。わかった、待つ。アナタ、だあれ？」

「……アルマ。これでもジャーナリストな」

「アルマ……よろしくアルマ！」

そういうと、にっこりと少女は微笑みを浮かべた。

そのあまりの無防備さに、アルマの心も彼女に打ち解けようとする。

「……っ！」

のも束の間、少女は急に立ち上がると、今までにない険しい顔つきになった。

「くるっ……」

【第三章】 逃亡

「……来るっ！」

「え？」

一体何が、そう尋ねるより早く少女は動いた。
先程示した、大きな翼を広げるとベランダへと走った。

「アルマ、こっちっ」

促されるまま、アルマはベランダへと向かった。
と、同時に部屋のドアが勢いよく吹き飛ばされた。

「！」

ドアは木片と化し、炎に包まれながら宙を舞ったかと思うと、地に
伏すより早く灰となって風の思いがままとなった。

開け放たれたドアからは、三人の男達が入ってくる。
金髪が二人、銀髪が一人。

「兄さん……」

少女は、半分悲鳴のような声を上げると、一歩後ずさった。
反射的にアルマの腕を掴む。

「リュウ……帰るぞ」

左目に傷を負った金髪の男が言った。

「イヤッ！」

「お前の我儘のせいで、一体何人の人間が犠牲になると思っているんだ？」

その男だつて、例外じゃないんだぞ」

他の男達も口々に言う。

「お前ごときに人ひとりの命を負うほどの価値があるっていうのか？」

「お前など、一兵器にすぎないだろう」

「リュウ……帰ろう？」

最後に銀髪の男が言った。

一番穏やかな口調だった。

少女、リュウが悩むには十分すぎる優しい声だった、が……

「いや、私は戻らない！」

少女は大きく翼を広げると、何事かを叫んだ。

彼女の周りが青白く輝いたかと思うと、たちまち翼から光線のようなものが発射され三人を襲った。

爆発音。

あちこちで火花が散り、激しく部屋中を破壊していく。

男達とアルマ達の間には煙幕が生じたのに乗じて、二人はベランダから飛び降りた。

が、下にも二人ほど追手が居たようだ。

金髪の女と、背の高い灰色の眼をした男だ。

「一人だけ逃げられると思ったら大間違いよ、リュウ！」

女は銃のようなもの構えている。

「戻らないのなら、強硬手段だ」

灰の眼の男が言った瞬間、女が発砲した。

発射された弾はあちこちに無造作に飛んだかと思うと、物体にぶつかった瞬間爆発した。

「な、何なんだ？」

「アルマ、後で説明する。下がってて！」

少女は再び翼を広げた。

今度は、少女の体ではなく翼全体が光を帯びたかと思うと、すぐさまそれは鋼鉄化する。

次なる攻撃へ向けて女が銃器を構えた。

しかし、それよりも速く少女の攻撃は実行された。

鋼鉄化した翼から、刃物のような羽根が繰り出され、女の銃器に命中中。

羽根は、銃器にささると、先程の女の銃弾のように爆発した。銃器だけを見事に壊した、という点では幸いだったであろう。

自分の攻撃を取って返され、苦難の表情を浮かべる女の横で今度は灰の眼の男が動く。

男は拳を固めると、少女に突進。

攻撃の直後で、少女も安易に動けない状況だった。
反応が少し遅れる。

（やばい……！）

アルマは懷から、銃を取り出すと、男の腕を目掛けて発砲した。

「！」

銃弾が当たり、男の動きがやや鈍くなったところを、アルマは少女の腕を引き自分の方へと手繰り寄せた。

男の拳が鋼鉄化から戻った翼にかすり、嫌な音を立てて焦げついた。

ふらつく少女を抱きとめ、再び男の足に発砲。

割と近距離、男は低いうめき声を上げた。

少しは足止めになるだろう。

ついでに女の方にも威嚇で発砲しておいた。

「行くぞっ！」

「うん……」

とりあえず、少女の手をひいて二人のもとを走り去った。

宿から煙が立ちこめ、主人や他の客人達が騒いでいるが、気にしている余裕などほとんどない。

アルマの頭には、もうこの少女の手を引き、新しい隠れ場を探すことしかなかった。

【第四章】 休息

日が沈んだ頃、アルマは少女を連れて新しいホテルにチェックインした。

少女は疲労困憊といった様子で、ソファに座るアルマに寄りかかっている。

戦闘では、かなり無理をしたのであろう。

眠たそうな瞳をして、アルマを見ずに話しかける。

「天使ってね、新しい兵器のことなの。だから私も兵器なの……」

アルマは答えずに少女の髪を撫で付けた。

艶やかな髪がいと美しい。

こんなに幼い少女が将来兵器として活用される使命にあるとは……
本当に気の毒でならなかった。

「さっきの人達、みーんな本当のお兄さんとお姉さんなんだよ。私は六人兄弟の末っ子なの。」

名前呼ばれてたけど、実験用の名前なんだよ、あれ……」

自分の髪を撫で付ける腕に擦り寄って、少女はうつととした。
それから、甘えるようにアルマを見つめる。

「名前……考えてくれた？」

「……」

「私、普通に人間らしい名前がほしいの」

少女は眠たそうに、目の端をこすった。

「名前……何でも良いのか？」

「うん。数字じゃなかったら、何でも良い」

（数字……実験用の名前は数字と同じ意味だったのか）

少し哀しくなったが、それを紛らわせてアルマ微笑って言った。

「リーリア……」

「リーリア？」

「そう、リーリア……俺の大切な人の名前と一緒にだ。あまり名前を付けるのは上手くないんだ。

……それで良いか？」

（人の名前と同じだなんて、少し失礼だったかな？）

「イヤだったら、また別のを考えるが……」

「ううん。良い」

少女は、にっこり笑った。

満足そうな笑顔で、アルマにもたれかかる。

「リーリアで良い。リーリアが良い……ありがとう、アルマ」

あまりにもあっさり、受け入れられてしまった。

「どついたしまして……リーリア」

その言葉に、またリーリアはにっこり笑った。

そして、再び眠たそうな表情になる。

「アルマ……優しい人。アルマ、大好き」
「え？」

突然の言葉に、アルマは驚いた。
恋の告白にしてはあまりにも、緊張感がない。

（人間として……って入れろよ。びっくりするなあ。でも、まあ仕方がないんだろうけど）

「大げさだぞ、名前くらいで」
「ううん。アルマは良い人。だから、好き」

つたない言葉使いが、いつそうリーリアの幼さを引き立てた。
それが可愛らしくて、変に息が詰まりそうになる。

アルマはリーリアの髪をまた撫で付けた。

「ありがとう、な？」
「アルマになら、全部あげられるのに……」
「え？」

「私の力も……私自身も何もかもあげて良いのに」

実に眠たそうな声音だったが、アルマの脳に鋭く響き渡った。
おそらく彼女は兵器、つまり今まで物として扱われてきたのである
う。

だから、きつとこんな言い方しかできないのだ。

（哀しい……やつ）

「子供が……ませたことを言うもんじゃない」

半分泣きそうな声でアルマは呟き、リーリアの頬をつねった。

本当はもっと優しく触れて、抱きしめてやりたかったが、理性が彼を押し留めた。

「だって、わかんないんだもん……いっぱい好きな感じってどんな言葉を使えば良いのか……」

それから暫く沈黙した後、リーリアは思いついたように言った。

「アルマは私を守る……!」

逆だろう、とアルマが指摘しようとした時、彼女は既に夢へと誘われていた。

長いまつげで影ができた頬が愛らしかった。

「一緒に、逃げような……」

ソファからリーリアを抱きかかえてベッドに移すと独り言のように呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4692a/>

造られた天使

2010年10月11日23時01分発行